

ドイツ通信 Ⅲ

大阪大学経済学部 宮本匡章

☆ ドイツと日本との距離

日本とドイツとの距離は、時差八時間、最短の北廻り飛行機であれば十八時間、航空便の手紙であれば三日間というのが、一応われわれの常識である。昔に比較すれば、日本とドイツとの距離は決して遠くないといえるだろう。しかし、ドイツからみた日本が、私には無限のあなたにあるかのように感ぜさせられた経験をした。1月27日姉から手紙を受取った。十九日に父死去の知らせ。高令でありまた心臓病をもつ父の万一の場合を予想し、出発前に依頼はしてきた。とはいえ、心の底では一人息子の帰国を元気で待っていてくれると信じ込んでいただけに、さすがにガックリときた。手紙を受取った時にはすべてが終了してしまっていた。日本がもっと近ければ、せめて今迄の親不孝のつぐないに、自分の手で葬儀をしてやれたのにとすると、流れ出る涙を止めることができなかった。こんな経験をかかりの方々が持っておられることと思う。しかし、この苦しさはちょっと表現の仕様がなない。

この事件で、私の留学生活は変更を余儀なくさせられた。残務整理のため1ヶ月半ばかりの期間短縮、夏学期終了後に予定していたヨーロッパ旅行を春休み中に実行することが、この変更の大きなものであった。

☆ ヨーロッパでの1つの旅行方法

冬学期が2月中旬に終了し、私自身の心にもやや落着きを取戻した春休みに、ヨーロッパ旅行を実行した。この場合の問題は、時間と金であった。日本にいる時に較べて自由になる時間ははるかに多いのであるがそれでも1週間以上にわたる旅行をしようと思えば、大学の休みを利用する以外に方法がない。しかも折角の機会であるから、出来るかぎり多くのところをみたいという欲がある。にもかかわらず、自由になる金は少ない。

そのような時にありがたかったのは、特別航空料金であった。御参考までに、私の実際例を1つ書いておきたい。ボンからアテネまで往復すると、航空料金が1,001マルク必要である。それが、特別料金では791マルクと

なる。これに対する制約条件は、ドイツを出て、ドイツに帰ってくるまで、1週間以上1ヶ月以内滞在するということのみである。しかも、私の航空券をみると、ボン→チューリッヒ→アテネ→ローマ→フローレンス→ミラノ→ジュネーブ→ボンとなっており、ボン⇔アテネの計算上の距離と大きく喰い違わないかぎり、そのルートに近い都市をいくつ見物してもよいということになる。これを発見し、ルフト・ハンザやエア・フランスに交渉に行ったのであるが、最初はなかなか判ってもらえなかった。例えば、アテネに1週間滞在すべきで、あなたのように1泊では困るとか、途中でこのような多くの都市を入れることは不可能だという反論が出た。しかし、最後には窓口嬢が本部と連絡して可能だと知り、良い勉強をしましたと言われたことがある。他の航空会社や外の都市のことは知らないが、案外利用されていない制度ではないかと思う。

☆ 思想の強さ

4月下旬から5月にかけて、私のドイツ留学を可能にしてくれたフンボルト財団による三週間のドイツ国内バス旅行があった。私の参加したのは、ボンを中心とした第1グループで、総員二十七名、そのうちチェコ、ハンガリ、ポーランドといった共産圏の学者が%を占めていた。彼等にとっては、ドイツ語が第二母国語であり、ドイツ人並みのスピードで自由にドイツ語を使用している。この点、われわれ東洋人の語学力とは雲泥の差があった。しかし、ここで問題としたいのは、彼等の全部ではないが、学問と思想とを密接に結びついたものと信じ込んでいることである。われわれのプログラムには、フォルクス・ワーゲン社や新設のコンスタンツ大学の訪問が組み込まれていて、単にそこを見学するのみでなく、若干の討議をする時間が与えられた。その時に出てきた質問は、例えば、自由価格制に対する批判であるとか、研究に対する国家的管理の必要性とかで、およそわれわれの考えている埒外のものばかりであった。私などは、確固たる信念があつてのことではないが、現在の日本なり自由世界を支配している資本主義体制を前提とし、それを基礎として学問をやっているのに対し、彼等にとってはその

前提にこいて問題があるとの強い意見を、このような場所ですら強調せざるをえないことを眼の前で経験すると、思想のもつ強さを思い知らされることになった。

旅行も最後の日を残すだけとなったハイデルベルクでの夜、チェコの数学者夫妻と話し合う機会をえた。一緒に夕食をとりながら、思想問題についての私の疑問を述べると、「学問の世界に思想が不可欠とは思わない。自分の国と、ドイツや日本と比較してみる時、この思想的考慮が、学問の世界のみならず、経済面でも大きな障害になっていることがよくわかる。理論をどのように利用するかには、国家によって相違があっても、理論は理論として研究しないかぎり、大きな進歩はないと思う。」という返事であった。そして、「社会科学の場合、むづかしいことだが……」と付言するのも、彼は忘れなかった。もっとも、前記のような強い意見を、繰返し述べたのが、同国の自然科学者であったことは、いささか皮肉なことではあったが。

☆ 苦痛の1週間

ケルンにいる友人が発病、入院したので援助してほしいという連絡をうけたのが、5月26日の月曜日であった。ミュンスターにいるもう1人の友人とその日にケルンに集まり、面会日でないため本人には会えなかったものの、昨日面会したという日本人などの情報で、そう重い病気ではあるまいとの予測をして帰宅した。ケルンから汽車で半時間のところにいる私が、その週最初の面会日である水曜日に病院に出掛けたところ、検査のつかれで本人はねむってしまっていた。彼の指導教授の秘書嬢とともに、主治医に会うと、専門用語などあって良くは判らぬものの、頭に腫瘍があり、手術の必用性を検討中ということ。その話を聞いている間に、私の身には冷汗が流れ出した。本人が手術をするなら日本でしたいと言っていたことも知っているのだから、これからどうすべきかを考えねば……ということのみが頭にあった。木曜日に教授が最終決定をされるという。その日は、ケルン在住の日本人の方々といろいろ相談し、とにかく明日の結果待ちということで、夜11時ケルン発の汽車で帰宅した。彼には年寄った母親がいる。異国で父の死を知った苦しみをもっているだけに、万一のことを考えると、その夜はねむることができなかった。翌木曜日の朝、ふと、同じフンボルト奨学生で、東大外科の人を想い出した。その人とは、フンボルトの大会のとき、ダルムシュタットで3泊を私と一緒にしているし、前記フンボルト旅行の時には病気の友人と同じグループだった人である。ところが、アーヘン在住はわかっているが、住所を知らない。管理人の夫人に事情を話し、いくら費用がかかってもよいか

ら、電話でさがし出して欲しいと依頼し、20分後にやっとその医師と連絡がとれた。その医師と一緒に病院に行き、主治医と話し合ってもらい、診察もしてもらった。その結果は、今の時点で帰国させることは生命の保証をしないこと、手術は是非とも必要ということであった。はっきりした病名は、手術をせねばわからぬが、右前頭葉右側に相当大きな腫瘍らしきものを、はっきり認めることができるという。最悪の事態となった。手術は今週中というので、ドイツ語のうまいケルン在住の人に、日本人医師の立会いの交渉は依頼したのだが、その外にどうすればよいのかさっぱり頭が回転してくれない。とにかく、同じ大学所属のフランクフルト在住の教授と、シュンスターにいる友人とに電話をし、即刻ケルンまでお越しを願うことにした。全員が集ったのが午後11時半。いろいろ検討の結果、万一の場合が予想されるので、とにかく大学と家族に連絡することになり、午前2時から4時まで、ケルン駅の郵便局で電報を打ったり、国際電話をかけたり、速達を出すというあわただしさ。この日も2時間ほどとうとしたのみ。金曜日には、土曜日午前9時から手術と決まる。日本医師の立会いも可。全員明日に備え、ホテルを確保してねむることにした。手術中は何としても着着かなかった。短時間であれば危ないという予想で、3～4時間の手術と聞いていたのに、立会った医師が1時間半位でにこにこして出てきた。血管腫というもので、実にうまく摘出しえた。まず大丈夫ということ。こんなうれしいことはなかった。70才近いドイツ最高の脳外科の教授が執力下されたことも、彼には幸した。その後彼は順調に回復している。6月末には退院も可能といわれている。ここでは、私に直接関係することしか書かなかったが、異国での発病とあって、在独の日本人の方々が、実によくやって下さった。これは恐らく一生忘れられることのできない事件となることであろう。

☆ ウィーンでの経営学会

ケルンの友人がまず大丈夫ということになったので、6月4日からのウィーンでの経営学会に参加することができた。4日から9日までが期間で、実質的な報告は、5日から7日までの午前中のみという、ゆったりしたもの。前記の事情もあって、私は最初の3日に出席したのみであるが、まず報告のテーマを書いておこう。

5日には、「経営問題としての維持」「経営成長の計画と管理の問題」、6日には「経営の情報理論」「料金型態と価格要求」「複雑な決定プロセスの組織」、7日には「景気政策に用いられる特別減価償却の経営問題」「消費財における販売方法の利益管理」「経営比較の意義と

限界」というテーマでの報告があった。いずれその詳細についてはドイツの雑誌に発表されることであろうから、私などの耳から入った概要を、ここでお伝えしない方が、賢明というものであろう。

私の個人的な意見や友人の話によると、特に新しい研究方法とか、体系だった理論の提示はなく、それぞれのテーマについての無難な報告に終わったとあってよい。例えば、私に関心をもって聞いた「経営成長の計画と管理の問題」については、ケルン大学のミュンスターマン教授が報告されたのであるが、その問題の重要性をまず説き、最近どのような研究が行なわれているかを示されたにすぎない。その際に出てきた名前も、サイヤート・マーチ(企業の行動理論)、フォレスター(インダストリアル・ダイナミックス)、ボニニ(企業成長のモデル)やドイツのアルパッハ教授の論文で、特に新しいものはなかった。今後どのような方法でこの問題を研究すべきかについての意見を知りたかったのであるが、少なくとも私の耳には、この点に関するドイツ語が入ってこなかった。

その前夜、今年2月に教授資格論文を書いたというフランクフルト大学出身の人と話し合い、彼のテーマがこの問題であったため、不自由なドイツ語ながら、少しばかり議論をしてみた。彼の意見によると、費用側面から経営最適規模を論ずることは、理論の遊戯にすぎないという。彼自身も、まだどのように経営規模ないし企業成長の問題を取扱ってよいか、はっきりしていないようであるが、私と同様に、従前よりもより多くの側面から総合的に考察する必要があるのを知った。若い人々は同じ悩みを持っているようである。実際のデータを巧く処理しながら、少しずつ企業成長のモデルを改良して行くのが1つの研究方法となるのであろう。

いろいろな招待の席で、かなりのドイツ人教授と知り会ったが、学会を楽しんでおられるように受取れたのは、どこの国でも同じということであろうか。特に残念であったのは、第1線の若手教授が殆んど欠席していたことであった。

☆ 最後 に

10ヶ月ばかりの留学生活から知ったり感じたりしたことを、3回にわたり全く個人的なものとして書いてきた。本来は、このような雑記のようなものではなく、経営に関する専門的なものを書くべきではなかったかと反省している。今、ボンの同じゲストハウスに、同じ教授のところへ研究にきている私より年上のチェコの経営学者が住んでいる。お互いの部屋によく出掛け、専門的な雑談をしている。彼の場合、思想上の問題は全く感じなくてよい。そして2人の一致した意見は、今のドイツからどうしても学んで帰らなければならないものはないのではないか、われわれの留学の意義は、講義等から開放され、ゆっくり自分の研究を再検討することではないか、ということであった。多少、我田引水のきらいがないでもないが、ボン大学で知ったことや学会で経験したところから帰郷しうすることは、少なくともドイツからすべてを学ぶという研究姿勢を後退させ、自分の関心のもてる問題について自分自身で考えるべきだということである。もっとも、このような考え方が、今迄私が雑記を書いてきたことと直接結びつくわけのものではないが、無関係でもないといえそうである。

何はともあれ、ドイツ留学という貴重な体験をさせて頂いた関係者の方々に、心から感謝している。

(1968年6月13日)

(宮本助教授は7月11日無事帰国致しました。)